

教 師 ノ ー ト

日付	2017年 8月27日
単元	基本的な教理・2
テーマ	悔改め
タイトル	救い・1 罪人が悔改めるとき
テキスト	ルカ15:1-7
参照箇所	創世記3章、イザヤ53:6、エゼキエル33:11、34:11-16、マタイ18:12-14、ルカ5:31-32
暗唱聖句(教会で使用している聖書訳を記入して下さい)	ルカ5:32 or ルカ15:7

AG 日曜学校教案参照箇所 (リンクできます)

メモ(情報・例話など)

※救いの学びのはじめには、人間がなぜ救われなければならないかという学びが必要です。人間の罪について知らない人が、救いを理解することはできないからです。しかし、どんなに丁寧に罪について説明されても、人が素直に「私も罪人です」と認めることは難しいのではないのでしょうか。赦されることを知らないままで、罪を認めることはできないのです。神の愛がしっかりと子どもたちの心に届き、聖霊の助けがあってはじめて、彼らは自分の罪を認め、悔い改めることができます。神は、たったひとりの罪人でも、自ら捜し求めてくださり、その罪人が悔い改めるなら最高に喜んでくださるお方です。人間の罪の問題もしっかりと教えられるべきですが、同時に神の愛もしっかりと語られるようにしましょう。

□導入

例: イエスさまは、取税人や罪人たちと親しくされました。イエスさまは、彼らのそば近くで話をされ、食事さえも一緒にされました。しかし、パリサイ人や律法学者たちは、そのことが気に入りませんでした。彼らは、律法を守っている自分たちだけが、神さまに受け入れられるにふさわしいと思っていたからです。しかし、イエスさまは、そんな自信満々な彼らに、例え話をして、間違いを指摘しました。

□ポイント1 人間は、神さまからはなれてしまいました(人間の罪について)

あるところに、100匹の羊を飼っている羊飼いがいました。そのうちの1匹がいなくなってしまうました。羊は、人間をあらわしています。100匹の羊をもっていた羊飼いは、神さまのことで、もともと人間は、神さまに造られたので、神さまのものでした。羊が羊飼いのものであるように、人間は神さまのものでした(エゼキエル34:11-16)。

羊は、羊飼いに愛されます。えさをもらったり、安全に休ませてもらったりします。それなのに、1匹の羊が羊飼いのところから、いなくなってしまうました。人間(アダムとエバ)も、はじめはエデンの園で、創り主である神さまとの自由で平和な交わりの中に生かされていました。しかし、人間は、神さまに反抗して、罪を犯し、神さまから離れてしまいました。人間は、神さま中心ではなく、自己中心に生きるようになったのです。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った」のです(イザヤ53:6)。その結果として、ローマ3:23に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とあるように、すべての人が罪人となったのです。人間は、だれでも・ひとりひとりが罪人なのです。

☞人間にどのようにして罪が入ったかについては、こひつじホームページ2013年6月30日の「人間と罪・1」、同年7月7日の「人間と罪・2」を参照してください。

□ポイント2 神さまは、ひとりひとりを愛してくださっています(神の愛について)

1匹の羊を失った羊飼いは、どうしたでしょうか。他の99匹の羊たちを野原に残して(おそらく他の羊飼いに預けて)、1匹の羊を捜しに出かけました。羊飼いは「谷に落ちてケガをしていないだろうか」「オオカミに食べられはしないだろうか」「お腹がすいただろうか」「寒くて眠れないのでは」と逃げていった羊のことを心配したでしょう。危険をおかし、時間も体力も犠牲にして、一生懸命捜しました。「見つけるまで捜し歩いたのです。それは、羊飼いにあって、1匹1匹どの羊も大切だったからです。

神さまは、私たちを愛してくださっています。1匹のために99匹をおいていくなんて、不釣り合いと思うかもしれませんが、神さまにとっては、それほどまでに、ひとりひとりが特別に大切なのです(イザヤ43:4)。人間は、罪人です。しかし神さまは、律法学者たちのように「そんな自分勝手な罪人は、放っておけばいい」「言うことを聞かない羊が谷に落ちて死ぬのは当然の報いだ」というような非情なお方ではありません。神さまは、神さまから離れてしまったひとりの罪人を、助けるために、捜してくださっているのです。

□ポイント3 神さまは、罪人が悔い改めることを喜んでくださいます(悔改めについて)

羊をみつけた羊飼いは、大喜びでその羊をかついで帰り、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言います。イエスさまは、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです」とおっしゃいました。律法学者たちは驚いたでしょう。イエスさまは正しい人と一緒にいて喜ばれるのではなく、罪人がイエスさまのところに帰ってくることを喜ぶとおっしゃったのです。イエスさまは、「正しい人を招くためにではなく、罪人を招いて悔い改めさせるために来たのです」(「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です」ルカ5:31-32)。

「悔い改める」とは、罪からはなれて、神さまに立ち返ることです。私たちは、みんな罪人です。神さまに造られたのに、神さまからはなれて自己中心に生きて来ました。それを神さまに「ごめんなさい」と言って赦していただき、神さまのところに帰ることです。私たちが悔い改めるとき、神さまは、必ず罪を赦してください。それどころか、大喜びで迎えてくださいます。「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ」(エゼキエル33:11)とあるとおりです。

☞悔改めれば救われるというのは、何か人間の行動が主導のように感じてしまいがちですが、そうではありません。悔改めは、神さまがはじめてくださった救いの働きに対する、人間の応答です。ここでは、神さまが、まず私たちを救うために、捜し求める愛を示してくださいました。救いは、神さまが主導してくださった恵みの働きであり、悔改めは、それを受ける応答の行為です。

□結論 神さまは、ひとりの罪人が悔い改めることを喜んでくださいます

(聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう)

例1:まだイエスさまを信じていないお友だちへ:神さまは、あなたを特別に愛しています。あなたを捜し求めています。もともとあなたは神さまに造られました。だから神さまにとって、あなたは特別に大切なのです。あなたが、神さまのところに戻るなら、神さまは最高に喜んでくださいます。今日信じられなくても、教会に通い続けてください。自分の力で頑張っただけでなく、神さまは見つかるまで捜してください、肩に抱えてあなたを導いてくださいます。神さまの愛が分かったときには、素直に悔改めればよいのです。

例2:クリスチャンのお友だちへ:もう一度、捜して救ってくださった神さまに感謝しよう。救われたことを喜ぼう。そして、あなたも、失われた魂を愛し、お友だちが救われることを、最高の喜びとしよう! お友だちや家族を導いて、救われたらホントにウレシイよ。それを体験しよう!